



冷徹クール男子は、彼女の前でだけ偏愛過保護に変貌する

【幼馴染のAV男優が私にだけ狂った独占欲をむきだしにしてくるスピノフ】

体験版

冷酷クール男子は、彼女の前でだけ偏愛過保護に変貌する



※画像はPixAIで作っています※

## 【本作をお読みいただく前に】

本作は、ヒロインを愛するあまり狂った独占欲を見せるヒーローとのロマンスを描いた作品【幼馴染AV男優が私にだけ独占欲を向けてくる】のスピノフ作品の体験版です。

独立したストーリーになっておりますが、作中に一部本編登場人物の記載があります。本編未読の方でも違和感なくお読みいただけるよう配慮しておりますが、何卒ご理解いただければ幸いです。

## 【過激な描写】

本編は甘くソフトな糖度をお楽しみいただける内容となっておりますが、一部過激な性描写（ポルチオ・ディープフェラ等）が含まれております。

苦手な方は、閲覧をお控えいただくか、ご注意の上お楽しみください。

## 登場人物紹介

・金崎 悠真（かなざき ゆうま）

本作のヒーロー、人気イケメンAV男優

フェラ狂で冷たくビジネスライクな性格。私生活でも割り切った関係を好むが、陽菜と出会ったこ

とで、冷徹な仮面にひびが入り始め――!?

・橋本 陽菜（はしもと ひな）

本作のヒロイン、カフェとバーのアルバイトを掛け持ちする。

派手な見た目のせいで『軽そう』と誤解されがちだが、本当は好きな人と一歩ずつ愛を育みたいと

願う、健気な純情女子。

## 1、仕事の温度とプライベート

「あ、ぐうんっ、ううッ……！ ふ、あっ、んん、むう……んっ！」

強烈なスポットライトが照らすベッドの上で、作り物のように綺麗な女がだらしない表情で喘いでいた。

若手人気AV男優であるかなざきゆうま金崎悠真は、眼下で涙目になっている女優を涼しげな瞳で見下ろす。

スタジオ内に響いているのは、喉の奥を悠真のものに蹂躪される女優の、苦しげだが快感に溺れる声だけだ。

今日の撮影シチュエーションは、男性ファンの間で人気の高いハードな作品を女性向けにマイルドにした作品だ。とはいえ、女性を支配する側に男性が回っていることには間違いない、女優が多少無

理をすることも多い。

男根を咥えていた女優を、悠真は感情のない目で見下ろした。

「もう限界？　俺が許すまでちゃんとしゃぶれよ」

悠真は、端正で気だるげな顔立ちに酷薄な笑みを浮かべ、女優の頭を掴んで喉奥に肉棒を突きつけた。もちろん台本通り。だが、かなり奥まで刺さった感覚がした。悠真としては気持ちいいが、女優は想像以上に苦しそうにしている。

「ん……ぐっ……！」

「舌動かさせて。口に挿れてもらえて幸せだろ」

低い声で冷淡に囁きながら、悠真はさらに奥へ肉棒を押し込める。

自分のそれが大きいということに気付いたのは中学の時だ。高校でできた年上の彼女に、初体験を半ば奪われる形になった時、彼女は悠真の大きさに驚いていた。結局痛がっていたのをうつすら覚え

ている。

それから大人になって、顔が綺麗なことも相まってモデルにスカウトされた。下着のモデル案件を受けた時に男性器が大きいことが露見し、事務所がAVの出演を勧めてきた。

何かになりたいわけでもなかったし、お金は欲しかったから軽い気持ちで出演した。

楽に生きられるなら何でもいいと思っていたのだが、悠真は大きさも十分だったし射精も長いから、特定のシチュエーションものの出演に重宝された。

もともと、挿入は女性が痛がるから冷めるし好きじゃない。だから、舐められる方が好きだった。

AVに出演する女優達はその辺りはプロだから、悠真の大きさや放出量には驚かなかったし、仕事だから演技中は痛がらず楽だ。

それでも、相手を喜ばせることがメインに感じる挿入よりも、こちらが完全に優位なフェラの方がいい。

好みや性質もあって顔射やフェラものに出ているうちに、やっぱり顔が綺麗だからと女性ものの出演を勧められるようになった。

ただ、挿入が好きではないことに変わりはなく、インモラル系や言葉責め、オモチャ責めが主軸のものが多い。それでもファンは爆増し、気付けば悠真は若手のホープにまでなっていた。

自分主体ではなく、ただただ流されて生きてきたが、結果としては悪くないはずだ。

「――休むなって、もっと乱暴にされたいわけ？」

熱棒を喉へ打ち付けると、女優の瞳が涙で潤み始めた。視線は定まらず、ただ悠真が与える圧倒的な暴力に身をすくめながら口を動かしている。だが、これも台本通りだ。

「……じゃあ、そろそろご褒美あげるから飲み込め。こぼすなよ」

美しい顔からは想像もつかないSっぷりが女性視聴者には人気らしい。

女優がやっとかと言いたそうに瞬きをし、悠真をイかせようと熱心に舐めてくる。そろそろ射精し

でもいいと合図が出たので、悠真は口から引き抜いて、女優の顎を強引に掴んで口を開けさせる。

口内へ向けて、一気に白濁を放出する。液体を女優は放心した表情で受け止め、口の端から少しだけこぼす。

「はい、カット！ オッケーです！」

監督の声が響いた瞬間、スタジオの空気が一瞬和らぐ。

「金崎さん、お疲れ様でした。タオルどうぞ」

悠真はいつも以上に気だるげにタオルを受け取ると、足早にシャワールームへ向かう。背後で、女優がスタッフに支えられながら咳き込んでいたが、目もくれなかった。

「金崎さん、演技は凄いいし視聴者さんからの評判はいいけど、かなり乱暴だし冷たいよね」

「ちょっと、すごい熱！ 大丈夫ですか？」

女優に駆け寄ったスタッフの様子に気付いた監督が「今日は撮影ここまでにします！ バラシで

す！」と伝えている。

「金崎さん、気付いていたんじゃない……？」

女優側のマネージャーがそう口にしたのを、女優が止めた。

「いいんです、私がやるって言ったので。それに、金崎さんが解熱剤は飲まない方がいいって……」  
会話は悠真の耳にも届いている。だが、それらを全部無視して悠真はスタジオを去った。

（――体調管理も仕事の内なんですけど。熱出てるの皆に隠そうとしてた方が悪いし）

シャワールームで冷水を頭から浴びながら、悠真は深く息を吐き出した。

悠真が女の子たちをビジネスの道具として捉えるのは常だ。そもそも、女性側から外見や身体的特徴以外で求められたことはない。

であれば、悠真がそれと同等に彼女たちを見るのは当たり前のことだった。

ぼうっとしていると、シャワールームに誰かが入ってきて、それから声を張り上げた。

「あれ、ここ冷水しか出なくて壊れてんだけど誰か使ってる？ 冷たいだろ、平気か？」

先輩男優の蓮だ。悠真が返事をする、と彼はあきれたように笑った。

「なんだ悠真か。よく髪乾かしてから帰れよ！」

「うっす」

蓮が出ていく気配がして、悠真はしばらくしてシャワーの水を止めた。

（……先輩って、チャラそうに見えて好きな人にだけマジで激重なんだよな……俺には一生理解できないかも）

人気者の先輩の顔を思い浮かべ、悠真は心の中で自嘲気味に笑った。自分はそんな情熱を理解できないまま、冷たいまま生きていくのだろうと思っていた。

一人の人間に執着するなんて効率が悪すぎる。性欲なら撮影現場でいくらでも発散できるし、女子なんて記号のようなものだから。



その日の撮影が終わり、すっかり夜も更けた頃。悠真は気晴らしに、普段とは違うこじんまりしたバーへ足を運んだ。

「いらっしやいませ！」

木製のドアを開けた瞬間、鈴を転がしたような明るい声が響いた。

カウンターの向こうにいたのは、店主だと思われる初老の男性と、ハーフアップにまとめた明るい金髪に、派手なメイクを施したギャルだ。

店選びをミスしたかと思ったが、ギャルが人好きのする笑顔でカウンター席を指し示してくるので、一杯だけ飲もうと思って腰を下ろした。悠真は冷めた視線で彼女を一瞥し、端の席に座ってウイ

スキーを注文した。

ウイスキーはかなり年代物がひしめいており、丸くて透明な氷と江戸切子のグラス、ドライフルーツと国産チーズが出てきた時点で、悠真はかなり気に入った。

「お客さん、ついてますね。今日手に入ったばかりの、オランダ産のグラスフェッドのチーズなんです。マスターとさつきつまみ食いして、美味しくってびっくりしちゃいました」

悠真の他に客がいなかったからか、ギャルが盛り合わせを置きながら笑顔で話しかけてきた。

「いただきます」

ウイスキーは鼻にまで抜ける樽の芳醇な香りがよく、チーズはたしかに驚くほど美味しかった。

「美味しい」

「でしょ？ よかった、気に入ってもらえたみたいで。ハモンセラーノもあるので、もしよかったら」

悠真は頷いてお酒とチーズに舌鼓を打った。

(ずいぶん軽そうなギャルだと思ったけど……)

美味しいものには精通しているようだ。その内容が増えてきても、バーのマスターは物静かでニコニコしており、ギャルはてきぱき仕事をしながらお客さんとの接客と会話を楽しんでいる。

「陽菜<sup>ひな</sup>ちゃん、これお代わり」

「はい！　そろそろシングルのソーダ割りにして、お腹に何か入れておきます？」

お客さんが「参ったな、陽菜ちゃんは全部お見通しか」と笑っている。和やかで、それでいて心地のいい店だった。

「お兄さん、何かお代わりいます？　あと、この店初めてですよね？」

悠真がぼうっとしていると、いつの間にかギャル——陽菜が水を持って立っていた。それからひそひそ声で話すふりをしてくる。

「実は、マスターの作る、鶏ラーメンが絶品なんです。メニューにないんですけどね。こんなちっちゃな一杯なんで、ぺろって食べられちゃいますよ」

常連客にもわざと聞こえるように言っているらしく、奥で怡幅のいい紳士たちがうんうんと頷いている。

「……じゃあそれで」

「かしこまりました！ マスター鶏ラーメン一丁で！」

常連が「陽菜ちゃん、ここラーメン屋じゃないんだから！」と笑っており、陽菜もあはは、と屈託なく笑っていた。

たしかに鶏ラーメンはバーで出てくるにしては驚くような味で、一日のべにはぴったりだった。外まで見送りに来た陽菜が「また来て下さいねー」と明るく手を振っている。悠真はちょっとだけ頷いて、店を後にした。

## 2、冷やしおでんと、想定外の衝撃

――翌日。

いつも立ち寄るコーヒーストップがビルの点検作業でお休みだったので、悠真は別の店に足を運んだ。

ナチュラル志向の店らしく、原材料にこだわっているようだ。悠真も体調管理には厳しくしているから、正直この店に今まで気づかなかったことが悔やまれた。

オーダーを終えて支払いをしようとした時。

「あれ？」

見たことのある金髪が目に入る。クリっとした瞳に、がっかり引いたアイラインと限界まで上にあ

げられた束感のあるまつ毛。

悠真の視線に気づいたように、金髪のギャル——陽菜がこちらを向いた。そして、昨夜と同じく満面の笑顔になる。

「昨晚のお兄さん！ マスターの鶏ラーメン、美味しかったですよ？ 胃もたれしなくて、逆に元気になるっていうか……どうでした？」

「美味しかったよ」

「よかった！ 今コーヒーつくるので、あっちのカウンターで待っててくださいね！」

悠真はものすごく朝に弱いのだが、彼女の金髪と朝日を見ていたら目が冴えてきた。

そのうちに頼んだコーヒーを持って、陽菜がカウンターに現れる。

「お兄さん、甘いもの食べられます？ これ、試作品の全粒粉のクッキーなの。よかったらどうぞ」  
ありがたく受け取り、悠真は店を出た。振り返ると、陽菜が『コーヒーのカップを見て！』と身振

り手振りで伝えて手を振っている。

手元のカップに視線を落とすとラーメンどんぶりから不細工な鶏が顔を出している、愛嬌のある落書きが描かれていた。

「……っは、なにこれ」

悠真は思わず噴き出して笑ってしまっていた。

体験版はここまでです。

続きは製品版で

お楽しみください。



★特典SSつき★

冷酷クール男子は、  
彼女の前でだけ  
**偏愛過保護**に変貌する

幼馴染のAV男優が、私にだけ狂った独占欲をむき出しにしてくる

スピンオフ作品

純愛 独占欲 ソフトエッチ 恋人同士  
初体験 巨根 クール攻め ラブラブ